

第六十二回 静岡県保育研究大会

令和五年一月二十七日 浜松市

令和二年度からは開催時期を大きく変更し、初めて一月開催を企画した大会は「新型コロナウイルス感染症」の影響を受け中止を余儀なくされました。翌令和三年度は、直前まで集合型での準備を進めたものの、やはり感染拡大の兆候が見られた為、急遽WEBでの開催へと変更。感染状況の波に影響を受けてきた研究大会でしたが、ようやく落ち着きを見せ始めたこともあり、三年ぶりに対面の大会を開催することが出来ました。



大会が近づくに「コロナ感染や濃厚接触による十日間の療養期間と重なる」などから急遽欠席となってしまう登壇者も数名ありましたが、七二名からなる運営委員、実行委員、その他関係の先生方にご配慮頂いたお陰で参

加者にご迷惑をお掛けすることなく無事に進める事が出来ました。

冬の冷たい雨が降る一日となりましたが、三百六十四名の一般参加者を迎え、ピアノの伴奏にあわせて児童憲章が朗読され「アクトシティ浜松の中ホール」での開会式。土山運営委員長の挨拶に続き、開催地浜松市の山名副市長様、県健康福祉部より高橋こども未来局長様、県社会福祉協議会より高橋常務理事様からそれぞれにご祝辞を頂き、いよいよ分科会が始まります。今大会からは、来年七月に横浜市で開催される「関東ブロック保育研究大会」に第八分科会の議長をはじめ、第二分科会、第五分科会から各々の発表者を派遣しなければなりません。土山運営委員長、吉川副運営委員長も見守る中、午前中は研究と成果についての発表、午後は各分科会に参加された方からの質疑に応える従来の形で大会は進みました。活発な意見交換が行われ、関東ブロックの横浜大会へは、第八分科会議長の沼津市立大平保育所・高橋万寿美先生、第二分科会発表者は静岡市立横砂こども園・渡辺裕梨先生、第五分科会発表者は島田市五和保育園・山口学世先生を派遣することとなり、閉会式では今大会の研究成果を広く内外に伝えるための「大会宣言」が採択されました。



令和五年度には新型コロナウイルス感染症の類型が下げられる見通しとなっています。「こどもまんなか」社会の実現のため、「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」更なる質の向上を目指し、大会成果を保育に生かせるよう努めたいと思います。今大会の盛行に関わって頂きました多くの皆様に、心より感謝申し上げます。



第一分科会

テーマ【新たな時代の保育実践
～すべての子どもにむけて～】

発表者 ①南伊豆町立南伊豆認定こども園

主任保育教諭 外岡 裕美

②牧之原市 萩間保育園

保育士 中嶋 綾美

③掛川市 掛川聖マリア保育園

保育士 村田 幸

議長 御前崎市 やまもも保育園

園長 松林 洋子

助言者 静岡県立大学短期大学部

部長 永倉みゆき

記録者 御前崎市 やまもも保育園

副園長 藤田 裕子

発表(一) 人との関りの中で、のびのびと自分
らしさを発揮する子の育成

南伊豆認定こども園は、園目標「きらきら笑顔 共に歩む 南崎っこ」の意味する事は何か見直す事から始め、今の子どもの姿から課題となる事を話し合い、研究構成を決めていった。子ども達が主体的に取り組む為の環境構成と援助の工夫、人との関わりが深まる様な保育の工夫に取り組む事により、意欲や粘り強さ、関わり合って遊ぶ楽しさを味わう等、自分らしさを伸び伸びと発揮する子の育成に繋がった。又、保育者は肯定的な幼児理

解に基づいて、環境の工夫や適切な援助をできる保育が展開されるようになり職員の質の向上も実感できた。

発表(二) 「これやりたいな」

～主体性の芽を育む

保育を目指して～

萩間保育園では「明日も保育園へ行きたい」「今日もこれで遊ぼう」とわくわくしながら登園できるようになる事を目指して研修を行った。取り組みの一つとして、各歳児公開保育を通して保育を見合った。自分の保育を振り返る事により、声掛けのタイミング、環境構成等を学び、それを保育に生かす事で子ども達が自分で遊びを考えたり、発展させたり主体的に遊ぶ事ができるようになってきている。また、一人一人の子どもの理解について職員間で共有し、同じ思いで保育をする事で、園全体のチーム力や保育の資質向上に繋がった。

発表(三) 子どもたちとともに成長する保育を
目指して～ことばを受け止め、心に
寄り添う～

スマホやタブレットの普及による情報量の増加、コロナ禍による生活の大きな変化の中、子ども達の「語彙力の低さ」「コミュニケーション力の低さ」に着目した。実態を把握する為にアンケートを実施したところ「言葉遣い」において保護者と保育者の思いの違いがある事に気づいた。園からの「おすすめ絵本」

の発信は保護者支援にも繋がった。「あったか言葉」と「ちくちく言葉」について子ども達と正しい言葉遣いについて取り組みや、「エピソード記述」により子ども達が発する言葉の背景にある「心」に寄り添う事で子どもの洞察力が深まった。

助言者より

「新たな時代の保育」というとICTやタブレットの活用を想像しがちだが、時代が変わっても大事にしなければいけない事に取り組んだ視点が良かった。「主体的な子ども」のイメージはそれぞれ違う。保育者も子どもが世界に入っていく自分を解放して遊ぶ事が大事である。職員一人一人の根っこにある保育観を共に語り合える風通しの良い保育園にする事が園長・副園長の大切な役割と言える。自分は何を大事にして保育をしているのか考えるきっかけになれば良い。



第二分科会

テーマ 【配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて】

発表者 ①裾野市立深良保育園

主席保育士 渡辺 真紀

②静岡市立横砂こども園

保育教諭 渡辺 裕梨

③磐田市 聖隷こども園ここのとり

富丘

保育教諭 佐藤 未来

議長 富士市 すみれ認定こども園

園長 後藤 恭佑

助言者 静岡大学教育学部

教授 香野 毅

記録者 富士市 すみれ認定こども園

保育教諭 川口 友里

発表(一) 家庭での子育てを支え子どもの豊かな心を育む取り組み

すべての家庭に共通している、メディアとの付き合い方に着目したところから研究を始めた。ノーマディアチャレンジやペアレントプログラム研修の受講などから、家庭で子どもと関わる時間を大切にしてもらったり、子どもを肯定的に捉えて認知や見方を変えていくような支援方法を学んだりした。目に見えた成果は分かりにくくとも、日々の関わりを大切にしながら、くり返しの支援が必要で

あると感じている。

発表(二) 子育ての伴走者になるための保育者の役割と個別支援計画(サポートプラン)

保護者に寄り添う支援をするための、保育者の役割を考えながら研修を重ねた。園からの要望を伝え、保護者に受容してもらおうとする支援のかたちではなく、保護者の思いを聴いて寄り添いながら、子どもの将来に見通しが持てるような支援を目指していくことが大切だと学んだ。保護者との信頼関係が深まり「子育ての伴走者」としての役割ができる、子ども自身の園生活への安心感や、成長発達につながっていくことから、このような支援が大切になっていく。

発表(三) 一人ひとりを理解し、家庭支援につなげるために

子どもと保護者それぞれの、ありのままの姿を受け入れることを支援の土台としていく。個々の家庭に合わせた支援の方法を考えて園内で共有すること、家庭で担いきれない部分を園が子育てパートナーとして共に考え、必要に応じて専門機関と連携をとっていくことが大切である。保育者一人ひとりが専門職として、子どもと家庭、それぞれに合った配慮や支援を行う職務があることや、自身の専門性を磨いていくことも求められていることを意識していく。

助言者より

支援を考える際、事例検討をすることはとても大切なことと言える。また、その記録は子どもと保護者のものだと考え、教育、医療、福祉等それぞれの機関で共有できるような形のものが見えやすい。療育などの短時間の関わりより、日常の方が大切になるので、ペアレントトレーニングの必要性を考えていく。保育者としては、自分以外の見かたを受け入れ、自分がどう見られているかも意識してみる事が大切となる。



第三分科会

テーマ 【保育の資質向上を図り、保育現場の魅力を発信する】

発表者 ①沼津市 浮島保育園

園長 望月 裕巳

②静岡市立有度北こども園

園長 尾上 浩子

③浜松市 そらいろこども園

主幹保育教諭 磯川三知代

議長 静岡市立大谷こども園

園長 渥美 郁子

助言者 常葉大学保育学部

教授 山本 睦

記録者 静岡市立川原こども園

園長 村上 愛

発表(一) 保育の見える化をめざして

浮島保育園では「職員への見える化」と「保護者や園児への見える化」に取り組んだ。職員会議では少人数の部会を設定し、内容をシートにわかりやすくまとめた。結果を会議で共有することで時間の短縮や保育の充実、事故防止に繋がった。またドキュメンテーションを作成し、写真を使って保育の様子や十の姿を具体的に知らせる工夫や散歩のコースを絵や動画で説明、配信することで保護者への関心が高まっていた。価値観の共有化や周知の方法など今後も取り組みを続けていく。

発表(二) 保育の資質向上を図り、保育現場の魅力を発信する

保育者の資質向上のため、各園で公開保育を行っている。園内研修の充実を図るため外部講師を招き、保育の検証を行い、事後研修では良さの見つけ合いや課題に向けてのアイデアの出し合いを行った。参加する側は課題を持って他園の公開保育を参観するよう園長がアドバイスしたことで、保育者自身の学びとなりその後の保育に活かされている。今後も公開保育を行い、他園の良さを知るとともに自園の良さを再確認し園同士のつながりを積み重ねていき、保育の質の底上げを図っていく。

発表(三) 伝える、伝わる関係づくりをめざして

伝える、伝わる関係づくりが保育の質の向上につながるのではないかと考、研修を進めた。一年目会・サポーター会・パート会・月案会議など意見を出しやすい人数や、年齢や職種などが近い職員で会議を持ち進めていった。互いの思いを伝えあい、困っている職員に寄り添い相談できる関係づくりができ、円滑なコミュニケーションが取れるようになった。職員間でポジティブな言葉が増え子どもたちにも良いお手本となる関係作りが、チーム力を高め資質向上につながっている。

助言者より

イギリスではポートフォリオが評価の手法

である。個々の育ちや集団の育ちを保護者や同僚に伝え、子どもの深い思考や協同的な学びに繋げている。二歳からアクティブラーニングのための基盤づくりに取り組み、子どもの「自分で問いを立てる力」を育むことを目標としている。今後を生きる子どもには、創造的思考を持ち、自分で問いを立て探求していく人間に育てていくことが大切になる。一方、園長は組織として評価基準に一貫性を持ち、園の個性化やカリキュラムマネジメントを意識していくことが大切となる。質の高い保育は、家庭教育への介入と小学校との接続をどのように保障するかが課題となる。



第四分科会

テーマ 【地域の子育て家庭への支援の
充実にむけて】

発表者 ①沼津市 幼保連携型認定こども園
片浜桜

保育教諭 西村由紀子
②藤枝市 藤枝聖マリア保育園
保育士 菊川 郁野

③浜松市立中ノ町保育園
園長 吉永あゆみ

議長 磐田市 いずみ保育園

助言者 静岡福祉大学子ども学部
教授 永田恵実子

記録者 周智郡森町 ときわ保育園
園長 萩野 洋子

発表(一) ICTの活用による家庭支援の変化 及び地域の子育て家庭への支援の在 り方

ICT導入後、保護者と職員にアンケートを取った。改善点として園だよりを紙媒体でホールに掲示。良い点は外国籍の保護者写真を見る事でより理解を得られる・園児出席の共有を迅速に計れる・感染予防につながる受診の呼びかけ等高満足度が得られた。園に併設の子育て支援センター「かるがも」が地域の子育て交流の場になっている温かなエピソードを紹介。ご老人の方がベビーカーに乗せた赤ちゃんを、ニコニコと園を見ていた。支援員が声を掛け、申し込みの誘いをしたところ後日、申し込みがあり喜んで参加をされた。お話によると、赤ちゃんはひ孫で、病

気の祖父母に変わり子守りをされているとの事。『本当に救って貰いました』と感謝された。地域の中で曾祖父母や祖父母が幼子の子守りをする家庭がある事を踏まえて、『祖父母への啓発を増やして地域への支援の充実に図っていききたい』と、支援が必要な家庭への積極的な園の姿勢に全ての人が耳を傾けていた。

発表(二) 子どもの見方・関わり方

保護者との共通理解に向けて保育士自身のこどもへの関わり、一 環境の見直し 二 保育の可視化 三 保護者に向けての発信の研究内容をドキュメンテーションに取り入れて進めてきた。保育実践に関わる研究委員として各クラス一名ずつ選出し、『幼児期の終わりまでに育ってほしい十の姿』を基に保育士自身学ぶ場や保護者への発信方法、どう書いたら見て貰えるのか?どう伝わったか、揭示の仕方は: 揭示した後の保護者の反応から、文字を大きく・子どもの吹き・伝える文章の簡潔さ等の改善をした。子育ての悩みに応じたアドバイスや手立て・食事や睡眠の悩み等アイデア満載でスツキリと見やすいレイアウトのドキュメンテーション。栄養士による「おやつ役割」の講話や人気のレシピの紹介を通した保護者との共通理解に繋げ、子どもの育ちや保育が子育ての参考になる研究内容と、子どもを見直すという良い方向に向かった事が感じられた。

発表(三) 浜松市子育てサポートの活用 親子 が安心して過ごせるために

市内二十五か所に、市から補助が出て開設している「子育て支援ひろば」がある。浜松市子ども家庭部子育て支援課から発行されている【はますくファイル】は、母子手帳と同

時に配布されているが、認知度が低く母子手帳ほど活用されていない。子育て支援のスペシャリストの意見等が盛り込まれているのに『活用しないのはもったいない!』『やらないか!』と保育園で活用の取り組みが始まった。園内研修・クラス懇談会で活用する機会を作り、まずは保育士自身が学ぶ事でスキルアップを図った。園だより、一「はますくファイル」からちょこつとコラム」のコーナーを掲載し、保護者に「はますくファイル」の内容を知らせていった。また、『ドキュメンテーション』を活用し、子どもの姿の見える化を取り入れていった事で子育ての参考になっている保護者が増えた。発想の展開が良い結果に結びついたと感じられた。

助言者より

実習生の担当もされ『コロナ禍』で六月の実習が十一月に伸び対応に迫られた事、『今の実習生は、学校と園で育てていかなければならない現状を知って頂きたい』と話された。R四年度の保育要領の中に「ICTを保育の中に取り入れる」と国からの通達があるが、三園がそれぞれ工夫した『ドキュメンテーション』を作成している。

映像化した記録「見える化」は、日々の保育の振り返り・他の人の情報(違った見方)を知る等保育士自身が得る事も多く回を重ねる事でレベルアップに繋がる。三園の熱心な取り組みは、保育の質を高める事になると実感できた。



第五分科会

テーマ 【子どものより良い育ちと安全・安心の環境づくりにむけた関係機関とのネットワーク】

発表者 ①三島市 恵明キッズフロンティアレッジ

園長 杉村 太輔

②島田市 保育所型認定こども園

五和保育園

園長 山口 学世

③菊川市 ひがしこども園

園長 浅井 明代

議長 富士宮市 富丘こども園

副園長 足立 和俊

助言者 常葉大学健康プロデュース学部

准教授 中村 俊哉

記録者 富士宮市 富丘こども園

主幹保育教諭 川口 敦子

発表(一) ウイズコロナの中で待ったなしの子育

ち環境、社会の役割 考察から実践へ

我が国の新型コロナウイルス対策が始まった当初、原則開園がもとめられる保育現場では手探りの感染対策から始まった。マスクの着用、昼食時の黙食、行事形態の変更など、保健所や市担当課との連携を通じた感染防止対策をしていく中で、いかに子どもたちの育ちを保障していくかが課題となった。特に保護者への丁寧な説明をこまめに行うことで、

感染対策と保育活動の両立への理解がすすみ、保護者との信頼関係がより深いものとなっていたことを実感した。

今後もこどもの育ちを社会全体で整えていくためにさらなる各機関との信頼関係を構築していくことの重要性を確認した。

発表(二) 島田市のより良い小学校への接続の

為に

小学校就学にあたり不安を持っている保護者と子どもたちの育ちの視点を共有するため「幼児期の終わりまでに育って欲しい十の姿」について理解を深めていくことを市内施設長会合同で取り組んだ。

まずは「十の姿」を各園独自の「木の姿」で表現し園内に掲示、そして保護者説明会を開催するなど周知を図った。結果、保護者から園での遊びを通じた学びと就学後の学習のつながりを知ることができて安心したという意見を多くいただき、家庭でも子どものステキな姿に眼差しを向けることにつながった。

さらには学校教育課及び市内校長会と連携し、この「十の姿」を共有していく試みを始め、小学校との共通理解を持つことで園と保護者、学校の三者で子どもの育ちを深めていくことを続けていきたい。

発表(三) コロナ禍にあってもひとり一人により

良い就学となる関係機関との丁寧な連携と、こどもの安心・安全を守るための地域の様々な機関とのつながり

就学支援を必要とする子どもが年々増加傾向の中、行政機関及び医療・療育機関との連携は必須である。とりわけ市の子育て応援課の園訪問は重要な役割を担っており、定期訪問は年少児から始まり、未満児についても随時園訪問し、「迅速且つ丁寧な対応」をキーワードに各機関との繋がりを重視している。小笠東地区の発展と住みよいまちづくりを目的とした「コミュニティセンターくすりん」を拠点にした様々な地域団体、地域住民との交流を盛んに行い、地域の方々が子ども園のファンでありつづけていただけることで、子どもたちの安全が守られていることを認識した。今後も地域の活性化のために、子どもたちの元気を届けていくこと検討していく。

助言者より

全ての発表者の各園が、コロナ禍で外部との交流が制限されている中であっても試行錯誤しながら「子どもの育ち」を主軸とし、各関係機関との連携を行っている点を高く評価した。特に共通しているのは保護者への丁寧な対応という点である。参加者の発表に対する意見交換も盛んに行われ、各園の感染対策と子どもたちの育ちのための関係機関との連携等意見交換ができたすばらしい分科会であった。



第六分科会

テーマ【家庭や地域との連携による食育推進】

発表者 ①富士宮市 小泉こども保育園

主幹保育教諭 佐藤 美幸

②浜松市 ひまわり保育園

栄養士 渡辺 美和

③静岡市立中田こども園

副主任保育教諭 大石真由香

議長 静岡市 一番町保育園

園長 海野美代子

助言者 NPO法人こどもの森

理事長 吉田 隆子

記録者 静岡市 麻華こども園

園長 中原 美華

発表(一)

子どものつぶやきに耳を傾け「なぜかな？」そして「やってみよう」と米栽培、味噌作り、茶摘みを体験。すると、こどもが食に関心や意欲が高まり、創造力や探求心・協調性が育まれた。また、保護者が給食を食べる「ひだまりランチ」を企画したり、保護者に嗜好調査をしたりすることで、子どもが好き嫌いのことが減ったり、食べる量が増えたといったように子どもに変化がでた。更に、給食室の職員と保育士が情報交換をすることも大切だということに気づいた。

自然豊かな環境の中で、子どもとともに築

いた食育活動は、園の特徴を生かしたものであり大切にしていきたい。

発表(二)

給食で食事をとる子どもの姿から「正しい姿勢やマナーを身に付けてほしい」と願い取り組み始めた保護者アンケートを実施してみると、保護者自身が正しい姿勢を知らない実態に気づき、園から正しい姿勢をすることの大切さや具体的な方法をお便りを介して発信した。すると、家庭でも園でも正しい姿勢が習慣化され、食への意欲が高まったり、食べこぼしが減ったり、更に体感がよくなったという結果となった。

今後は、乳児期から正しい姿勢を意識して取り組み、個人の発達に合わせた環境作りを継続していきたい。

発表(三)

食べることに意欲がない子どもがいることに気づき「食べたい」意欲を持つてほしいと願い、人（地域や家庭）とのつながりに着目して食育活動に取り組んだ。

給食職員がだし汁を子どもに試飲させたり、地域の方と野菜栽培をしたり収穫をしたり、友達とごっこ遊びを楽しみながら配膳をする等、人とのつながりや食に関する体験は食べる意欲につながった。また職員研修を深めることだけでなく、保護者アンケートを通して課題を明確にし、実態に合わせた揭示物（人気メニューレシピ配布、クッキングの様

子等）を作成することも効果的であった。

助言者より

子どもの表情を読み取りながら実践を記録して取り組んだことが素晴らしい。今後も家庭や地域との連携が必要であり、保育所保育指針を保育士だけでなく全職員が理解して取り組んでいきたい。

食べたい気持ち、食欲が現れる場合は食卓であり、共食（人と関わりながら食べる）が原点である。社会性や生活を学ぶ場である食卓は心地のいいものになりたい。

食事の正しい姿勢やマナーは幼いころから取り組むべき。健康面での影響や人への感謝の気持ちがある。マナーには昔からの言い伝えがあり、人への配慮や思いやりのために意味があることを意識したい。

今後はSDGSを視野に入れて食育を考えたい。



第七分科会

テーマ 【保育の社会化にむけて

～保育の営みをいかに社会に

発信するか～】

発表者 ①長泉町立北こども園

園長 新村あかね

②静岡市 竜南こども園

園長 太田嶋俊彦

③浜松市 聖隷クリストファーこども園

主幹保育教諭 玉永真奈美

議長 浜松市 なかざわこども園

園長 細倉 泰生

助言者 常葉大学短期大学部保育科 教授 鈴木久美子

記録者 浜松市 なかざわこども園 主幹保育教諭 位田 愛子

発表(一) 幼児教育カリキュラムの作成に伴って

町立七か園は小学校への円滑な接続を目指し、独自の幼児教育カリキュラムを共同で作成した。留意点①誰が見てもわかる②町の子どもが同じ教育を受けられる③小学校への円滑な接続を考えたアプローチカリキュラム④町独自であること その際、①様式や方向検討②文章・デザインの工夫。その後教育長への報告・指導を経て完成。教育アドバイザー

の協力を得、上映会を小中学校の研究論文発表会や連絡会にて行った。一般に向けては、町HPに動画の掲載、小冊子の役場設置、入園説明会で詳細説明を行った。成果 ①一般の方に、遊びが学びの基であることが伝わった②小学校の先生が関心を持つ契機となった③職員が成果を実感し自信を得ることができた。今後も時代に応じた保育の可視化、発信を行っていきたい。

発表(二) 保護者・地域・学生に向けてICT活用の事例から

需要の高まるICTの活用について検討した。①方法 アンケートによる把握。②効果 行事、保育の配信等コロナ禍でも保護者への情報共有への有効性、迅速な情報伝達、午睡チェック、登降園管理等の安全管理の向上③課題 ICTのインフラ整備や予算、職員の経験不足による業務負担、求人効果、情報管理、漏洩等のセキュリティ対策。④導入二園視察 様々なシステムの実践例を共有した⑤対策 自治体への予算及び専門的な支援要望。各園が保育の営みや理念を可視化し、社会資源としての重要性を積極的にアピール。人と人を繋ぐ手段としてのICT活用を今後模索していく。

発表(三) 保護者や地域を巻き込む保育実践で保育を可視化する

園では一方的な発信のみでなく、保護者や地域を巻き込み共に保育を創り出す活動を継続してきた。①サマーフェスタ 園の保育目標を保護者会でも共有し、子どもたちに伝えたいこと〃を実現する場になり、保育内容、子育ての楽しみを家庭と共有した。②園庭プロジェクト 講師・保護者と協働の「子どもが自ら育つ園庭整備」。教育の価値観を共有する場となっている。③森作り 学園生徒、地域や保護者の手を借りて自然豊かな森を作っている。

園からの情報発信を経て地域の方がアクションを起こすことが子育ての社会化ではないかと考える。

助言者より

日常の保育業務が実は社会発信であることを確認し、様々な実践報告を経て「発信」自体が目的化していないかという課題も生じた。発信にはプロセスがある。保育の意図を理解した上で何を伝えたいかを整理・言語化し、マルチな選択を取る。各園の発信に至るプロセス・取り組みが、保育の質の向上・保育の社会化になっていくことを願っている。



第八分科会

テーマ【公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割】

発表者

①富士市立なかしま保育園

園長 浦田 直美

②川根本町立三ツ星保育園

園長 中田 泰子

③袋井市立笠原こども園

園長 澤部奈央子

議長

沼津市立大平保育所

所長 高橋万寿美

助言者

静岡英和学院大学人間社会学部

静岡福祉大学子ども学部

非常勤講師 徳浪 芳江

記録者

沼津市子育て支援課

主査 廣川 益子

発表(一)

教育・保育施設の連携と

保育の質の向上に向けて

持続可能な社会の作り手となる富士市の子どもの達の健やかな育ちと学びに向けて、行政主導の元、公立教育保育施設再配置計画を策定し、施設数の適正化と再編等の方策及び就学前の教育・保育の質の向上を目指す取り組みが始まっている。公立幼保それぞれ長年の研修を通して、大切にしたい保育の視点は、互いに同様であることに気づき、顔が見える研修体制の導入により、主体的・対話的な深い

学びの実践ができている。公立園が発信源となり、地域や富士市全体の教育・保育の質の向上を目指していきたい。

発表(二) 小規模の良さを生かした

川根本町の保育

出生数の減少、同学年の少人数化により、家庭的保育を大切にしながら、異年齢児保育、民公保育園交流等を通して、園児は、優しさ・気遣い・思いやりの気持ちが育まれている。町が掲げる「一人一人を大切にする幼児教育、保育、子育て支援」に向けて、公立私立保育園合同研修会等を重ね、子どもの理解と保育の質の向上と人材育成に力を入れ、地域の子育て支援の基盤を充実させていきたい。また、私立幼稚園との交流や、教育機関と密に連絡を取合い、幼小保の架け橋プログラムも積極的に取組んでいく。

発表(三) 地域に根付いた園づくり

子育て支援拠点施設機能を兼ね備えた、公立認定こども園として、社会や地域のニーズに込えられるよう、地域や行政と連携し、子どもの将来を見据えた教育・保育活動を実践している。特別支援教育では、こども支援室や幼児教育センターとの連携により、早期対応や個別面談、園訪問等、専門機関との連携強化と長期的な支援体制が構築されている。保育の見える化を図るためにICTを活用し、保護者の園理解や安心感を得られた。今後も、公立園の強みを活かし、時代のニ

ーズに合わせた、保護者支援、育児支援に力を入れた運営に努めたい。

助言者より

幼稚園、保育園、こども園、公立、私立、施設の形態、地域に関係なく、すべての子どもが格差なく学びを得られることが大切。地域保育をどのように高めていくのかを行政に働きかけ、私立幼保と共有をしていく。幼保小の接続を考える前に幼保接続、民公接続から始められるよう公立園がリーダーシップを図っていく必要がある。

公立園は、行政機関であり、地域住民に対する義務を果たす使命がある。地域ぐるみで子どもに関わることは住民を育てることに繋がる。



県保育研究大会に参加して

第一分科会

「新たな時代の保育実践」すべての子どもにむけて」をテーマとした三園の実践報告を聞きました。『新たな時代』を連想させるメディアを取り入れた実践ではなく、新たな時代に生きる中で生じる課題から、言葉や主体性を育む事の大切さに焦点を当てているという点が三園に共通していました。現状の課題に焦点を当てる事は、子ども達を取り巻く背景や、保育者としての自分の関わり方を振り返る事に繋がり、目の前の子ども達の姿を捉え、願いを持って保育していく大切さを改めて感じる事ができました。「子どもが主体的である為には保育者自身が主体的である必要がある」という大きな学びを、今後の保育に活かしていきたいと思います。

富士市立柏原保育園 渡邊彩乃

第二分科会

各園・地区での取り組みの発表を聞かせていただき、配慮を必要とする子どもの内面への理解はもちろん、保護者の心に寄り添いな

がらの家庭支援が大切であると感じました。揺れ動く保護者にどう寄り添っていか。サポートプランや共有シートを活用し、職員の共通理解を含め、医療・福祉・教育が一体となって子どものサポートをする体制を整えていくことが大切であり、そのためには日々の保育の中で様々な工夫が必要です。事例検討や特別支援・全体支援の在り方を改めて学ぶとともに、新たな気づきとなりました。各園や助言者の先生方のお言葉を基に、自園でも取り組める形を探り、寄り添う保育を今後も心掛けていきたいと思っています。

バディ保育園 川上 由理

第三分科会

「保育の資質向上を目指す」というテーマで発表を聞かせていただきました。どの園も素晴らしく、魅力的な保育の取り組みを行っていました。なかでも「園内研修」への取り組みは、限られた保育時間のなかで時間を作り、少人数で行うなどの工夫をこらしており、自園でも研修の内容や方法をどう進めていくか悩んでいたの、とても参考になりました。

少子化が進み、保護者が園を選ぶようになってきた昨今、いかに自園の魅力を発信していくかがこれからの課題になってくると思われます。保育者一人ひとりの資質を磨くことで、園の個性や魅力に繋がっていく。そうして作り上げた園を地域や保護者に発信して行けたらと思います。

認定こども園西方こども園 中村 その枝

第四分科会

「地域の子育て家庭への支援の充実」をテーマとして発表を聞きました。コロナ禍でなかなか地域とのつながりが希薄化する中で、発表されたどの園も自分たちの園の魅力と保育を可視化しドキュメンテーション等を外部にどんどん発信していくことで、地域や保護者とのつながりが強くなり子育て支援の拠点となっていくことで、子育ての不安や孤独感等がどんどん解消されるような工夫をしていると強く感じました。自分の園もそうですが地域・保護者との情報共有をすることで保育所・認可こども園等が子育て支援拠点となつて地域・自治体と協力してみんなで子育てができる環境づくりができればいいなと思います。

いさみ保育園 秋山 勇人

第五分科会

自園でも子ども達一人ひとりに願いをもち、日々丁寧に保育を行っています。その積み重ねが途切れてしまわないよう、園から保護者、学校、関係機関へと繰り返し伝えていきたいと思いました。

小学校で行われている「スタートカリキュラム」について、園としても知っておく必要があると思います。しかしこの機関においてもニーズが多様化し、手が回らないという状況です。「子どもの最善の利益」を考えた時に優先すべきもの、続けていかななくてはならないものの選別をしていく必要があると感じました。

認定こども園西方こども園 牧野 美保

第六分科会

子ども達が普段の生活の中で不思議に思ったことや感じたことに寄り添うことの大切さを改めて感じました。日常的な地域の方との関わりがあることで、子どもが興味を持ったことを手紙で相談する等のやり取りや、収穫した野菜や苗を手紙のお札に届けに行くことで、こども達が主体的に食に関わろうとする気持ちや責任感、感謝の気持ちが育まれている

て、素敵な取り組みだと思いました。

幼児期は食事摂取が受動的であり、保護者、保育者の対応が重要となります。生涯の食の基礎が培われていくという認識を再度持ち、保護者が食育に関心を持てるような掲示の工夫や、親子で興味を持てる食育の取り組みを考えていきたいと思いました。

たかつか光こども園 中澤 葵

第七分科会

八年前この分科会にて「地域とのつながり」「家庭との連携」という視点からの発表をしました。様々なご意見をいただき、「保育の社会化」についてずっと考えてきました。

今回「カリキュラム」「ICT」「保護者を巻き込んだの行事」三つの視点での発表をお聞きする中で、「保育の社会化」とはただ発信するだけではなく、私たちの日々の保育の営みを「可視化」し、結果ではなく「プロセス」を発信していくことが大切である。そのため、日々の保育の営みに自分たちがどう向き合い、語り合っていくべきか、再確認できました。これからも「保育の社会化」とは：足元を見据え、考えていきたいと思っています。

よこすか ぬく森こども園 鈴木 麻樹

第八分科会

各市町の現状によって少子化、統廃合等の問題に多少の差はあると思いますが、どこでも起こり得る課題だと思っています。課題をデメリットとして捉えず、それぞれの市町の特徴を活かして、前向きに取り組んでこられた三園の研究発表を聞くことができ、改めて、公立園の存在意義を考えさせられる機会になりました。

常に子どもを真ん中として考え、行政との連携、特別支援教育の充実、親しみやすい園づくり等、地域のニーズに応えながら、子育て支援の拠点園としての役割を果たそうとする意識の高さも感じました。今後、私たちも子ども達の健やかな育ちを見守り、支援の輪をつなげながら、子育てしやすい町づくりを市全体としてめざし、取り組んでいきたいと思っています。

静岡市立富士見台こども園 前田 範子

